２０２３年6月１８日　Ｎｏ.３６７２

先週の講壇から　　〝風の匂い〟

雅歌 第 4 章 16 節

聖句「北風よ、目覚めよ。／南風よ、吹け。／わたしの園を吹き抜けて／香りを振りまいておくれ。」(4:16)

１．《散らされた花》　札幌の教会にいた頃の出来事です。あるビルの前に、教会の会計役員をされている婦人が立ち尽くして居られました。彼女はアルバイトの新聞配達の途中、そのビルの花壇が荒らされ、駐車場にパンジーが撒き散らされているのを見て、心を痛めて動けなくなっていたのです。そこに偶然、私が通りかかったのです。私たちは一緒に花壇にパンジーを戻したのでした。

２．《立ち止まって》　彼女が躊躇して立ち竦んでしまったのには理由があります。道路に面しているとは言え、駐車場の奥の建物の花壇（私有地）です。パンジーを花壇に戻すことを考えてみたものの、後から通りかかった人に見咎められて、犯人扱いされるかも知れません。そんな時、私が通りかかったのです。私たちは困ったり迷ったり悩んだりした時に、思わず立ち止まります。誰もが困惑や悩みを嫌いますが、それが無かったら私たちが立ち止まることは無くなってしまいます。困って立ち止まっている時に、神さまは必ず誰かを遣わしてくださるのです。何も困らずテキパキ片付ける人もいるでしょう。でも、それは人の手の業です。悩みに共感して一緒に作業をする人が出て来る。これが神さまの御業なのです。

３．《香りを運ぶ風》　東京近郊の道路の交差点で、信号待ちをしていた歩行者がふと街路樹の植え込みに小さな看板があるのを目にしました。「立小便禁止」「立ち入り禁止」「犬の糞は持ち帰れ」等と書いてあるのかと思ったら、「ミントです。手で触れてみてください。風の匂いがします」と書いてあったそうです。そこにはミントが生えていたのです。都会の雑踏の中に、ミントを植えた人の心まで伝わって、優しい心遣いが薫るようだったと言います。私たちが立ち止まるのは、困った時だけではありません。嬉しい時、何かに心を動かされた時にも立ち止まるのです。忙しい毎日にも、私たちに立ち止まる心が与えられますように。

朝日研一朗牧師